

## 荒木牧人作 「閉ざされた心」

<前編>

大木久志 やっぱ、文化祭なんだし、ノリがある曲じゃなきゃダメなんじゃない、みずほ？  
黒澤みずほ そうね。あんまりヘビメタしてると、みんなノらないね。  
伊勢郷 邦楽？ それとも洋楽？  
みずほ うーん、どっちかっていうと、邦楽のほうがいいな。  
久志 おれは洋楽がしたいな。

<タイトル>

みずほナレーション わたしの名は黒澤みずほ。青春高校 2 年生。今、2 学期の初めにある文化祭のバンド・コンテストに向けて、練習を始めようとしているんだけど、まだやる曲を決めている段階。話しているほかの 2 人は、同じクラスメートでギターをやる大木久志と、ドラムの伊勢ちゃんこと伊勢郷。それにベースは、1 年生から同じクラスの山崎真男。毎週教会に行ってるクリスチャンという変わり種。それにボーカルのわたしの 4 人編成。

(効果音) (終業のチャイム)

久志 それじゃとりあえず曲も決まったことだし、あとは真男にも言っとくよ。

みずほ うん、ありがと。伊勢ちゃんのほうも頑張ってよ。

郷 おう。おれと久志は今からスタジオ行って練習だよ。

みずほ さすが。

郷 じゃあね。

ナレーション 学校の帰り道。わたしはずっとこれからのバンド活動のことを考えていた。

みずほ(モノローグ)リズムやノリを崩さないためには、真男と伊勢ちゃんに頑張ってもらわないとダメね。久志は動きながらメロディー弾いてりゃいいんだし、問題はわたしね。そう、高音の伸びがたりないんだ。だれも見えてないわね。(高音で叫ぶ)あ——

ナレーション わたしはだれもない坂道を叫びながら降りていった。と、その時——

(効果音) (自転車ブレーキ音。みずほとぶつかる音)

みずほ 痛い！ごめんなさい。

ナレーション 坂道を降りきった曲がり角で、自転車でいきおいよくぶつかった女の子は、頭を相当痛そうに押さえていたが、わたしを見た途端、なぜか逃げていつてしまった。

みずほ(モノローグ)なーに、あの子。こっちが謝ってんのに、あの態度。…ま、いつか。わたしは大人ですもの。

ナレーション 訳の分からないフォローをしながら、わたしは家に着いた。父と母は夜遅くに

ならないと帰らない。昔っからそうだ。でもわたしは独りでいることも結構好きだったりするのだ。

(効果音)

(電話の音)

みずほ

あ、電話。(少し間)もしもし、黒澤です。

久志

(フィルター音)みずほ？ おれ。

みずほ

久志？ 何？

久志

(フィルター音)あのさ、今度の日曜日、スタジオ借りて練習しないか？

みずほ

今度の日曜日？ うん、OK。やろう。あ、でも真男と伊勢ちゃんが…。

久志

(フィルター音)何、真男と伊勢ちゃんはダメなの？

みずほ

ううん。真男のほうがさ。「日曜日は教会へ行くんだ」って言ってたからさ。

久志

(フィルター音)あ、そうか。真男、“アーメン”なんだ。

みずほ

うん。でも午後ならオーケーだと思うよ。

久志

(フィルター音)そっか。じゃあ午後でもいいよ。

みずほ

一応連絡してみる。

久志

(フィルター音)サンクス。じゃあね。

みずほ(モノローグ)よし、善は急げ。真男んとこかけよう。

(効果音)

(電話のダイヤル音)

山崎真男

(フィルター音)はい、山崎です。どちら様ですか？

みずほ

真男？わたし。

真男

(フィルター音)何だ、みずほか。

みずほ

“何だ”はないんじゃない？ ま、いっか。あの、スタジオでのバンド練習のことなんだけど、「今度の日曜日やらない？」ってさっき久志から電話あったんだけど、どう？

真男

(フィルター音)日曜日か…。でも、僕…。

みずほ

分かってるって。「教会があるから」でしょ？だからわたしが「午後からなら大丈夫だと思う」って言っておいたの。そしたら午後からでもいいって。

真男

(フィルター音)本当？ 助かった。じゃあ伊勢ちゃんにも言っておかなきゃね。

みずほ

うん。よろしく。それじゃあしたね。

真男

(フィルター音)バイバイ。

(効果音)

(受話器を置く音)

みずほ(モノローグ)これでよしと。日曜日が楽しみだなあ。

ナレーション

バンド活動が本格化していくのがとてもうれしかった。わたしたちの力で、みんなが文化祭でノリにノッてくれたら、どんなにすばらしいか。そう思うと、自然に顔がニヤけてしまう。

次の日のことだった。わたしはクラスで意外な“出会い”を体験した。

久志                   みずほ。うちのクラスに転入生だってよ。  
みずほ                本当に？  
久志                   それが、えらい無口の子らしいぜ。  
みずほ                なんで分かん、そんなこと？  
久志                   学校に来る途中、見かけないきれいな女の子が登校してきたんで、うちのクラスのやつらが何人か声かけたんだけど、うんともすんとも言わないんだって。  
  
みずほ                ふーん。ま、男子って、無口なの多いから。  
久志                   それが女の子なんだよ。  
みずほ                え、女子？ それってサイアク…。  
(効果音)             (ドアの開く音)  
ナレーション        先生が教室に入ってくると、みんなの目が一斉にドアのほうに集まった。そんな注目の中を、細い体で色白の子がしずしずと入ってきた。  
  
みずほ(モノローグ) あ、あの子…。  
ナレーション        そう。顔だけ真っ赤にして先生の後ろに立っている少女こそ、わたしが昨日の学校の帰り、坂道でぶつかってきて、そのまま走り去ってしまったあの子だった。  
  
久志                   どうしたんだよ、みずほ？ あの子、知ってんの？  
ナレーション        わたしは久志に、事情をすべて話してあげた。  
久志                   へえー！ そうだったのか。それがあの子だったってわけか。  
みずほ                やっぱ、今度は謝ってもらわなきゃ。  
先生                   黒澤！ 大木！ うるさいぞ。  
真男                   ねえ、どうしたの、久志？  
久志                   実はさ。あの子、みずほにこの間、坂道でモロにぶつかったんだって。だけど謝りもしないでさっさと行っちゃったらしいよ。  
  
真男                   へえー、そうなお。  
先生                   こらー！  
ナレーション        転入生の名前は、緑川蘭。本当に何も言わない子だ。あいさつの時、蚊の鳴くような声で自分の名前を言ったきり、あとは黙りこくっている。クラスのみんなが気を遣って次々に話しかけても、うつむいたまま返事もしないので、男子のひんしゆくを買っていた。  
  
真男                   僕が話しかけても、やっぱりしゃべってくれないのかなあ。  
みずほ                試してみれば？  
真男                   よーし。  
久志                   物好きだよな、真男は。やめとけよ。  
真男                   今日いきなり話せるようになるかは分からないけど、いつか必ず心を開ける

ようになってもらうわ。神様にお祈りしよう！

みずほ

また真男の神通力？

ナレーション

そう言いながらも、わたしは“真男ならできるかも”という気がしていた。彼女は、だれでも困った人を見ると、黙っていられないたちだった。

緑川さんの席はわたしの斜め後ろになった。よく見ると、女のわたしから見てもすごく美人で、しかも雪のような肌には、正直本当に魅せられた。わたしが男なら、一目ボレだ。

その日の午後は、バンド名を決めるので、メンバー 4 人、わたしの家に集まった。

久志

あの緑川蘭って子、肌、超白いね。

郷

お前の好みだよな、色白の子は。

久志

まあな。でもさあ、何であんな子がしゃべれないんだろう。

真男

顔もきれいなのにね。

みずほ

運命とはそういうものよ、なーんちゃって。ま、彼女のこと、よろしくね、真男。せいぜい応援するからさ。

真男

うん、やってみる。あ、それでさあ、バンドの名前なんだけど。

久志

そうそう。だれか、“これだ”っていうの、ないかな？

真男

うーん。そんじゃ、みんなの頭文字とって“M・H・I・M”は？

久志

なんか、放送局っぽい。

みずほ

“ブラックスター”。

久志

んーん。まだ、ちょっと。

郷

それなら、“ブルーキャンサー”ってのは？

みずほ

えー？ “青い、がん”？

郷

違うよ、みずほ。キャンサーにはもう一つ意味があんの。へへ、知らねえだろ。カニ座だよ、カニ座。“青いカニ座”。

久志

あ、それいいな。こういうの、どんどん出してってよ。

ナレーション

バンド名決定会議は、優に 2 時間はかかったが、結局、伊勢ちゃんの言った“ブルーキャンサー”に決まった。

次の日のことだった。学校に行くと、あの緑川さんが、自分の机の周りや下駄履きをしきりと探している様子だった。

久志

ねえ、あの子、何やってんだろ。

郷

何かなくしちゃったみたいだぜ。おれ、手伝ってやろうかな。

久志

おれが聞いてくる。

みずほ

しゃべっちゃくれないわよ。

久志

そんなことないって。

ナレーション

久志は、緑川さんのほうへ歩いていくと、何かしきりにしゃべっていたが、彼

女はうつむいてイスに座ったまま、何も言おうとしなかった。事の次第は、帰りの学活の時、先生がみんなに話してくれた。何でも彼女の上履きが、朝、学校に来た時からなくなってしまったそうなのだ。先生は怒っていた。嫌な雰囲気のまま、学活は終わった。帰ろうとしたわたしは、下駄履きの上に、1足の上履きがあるのに気づいた。

みずほ(モノローグ)あれ？ これ、もしかすると緑川さんの？ でも、これってひどいよ。

ナレーション その上履きは、ズタズタにナイフで切られていて、つま先には履いても指が丸見えになってしまうぐらいの大きな穴が開けられていたのだ。下駄履きの上には、切るために使われたと思われるカッターが、刃を出しっ放しにしたまま置いてあった。

みずほ(モノローグ)だれなの、こんなひどいことするやつは？ 緑川さんは何もしていないのに…。

ナレーション と、その時、彼女がやってきた。わたしが手にした上履きとカッターを見ると、彼女は泣きながら外に飛び出してしまった。

みずほ ちょ、ちょっと！ わたしじゃないのよー！

ナレーション わたしは、緑川さんの上履きとカッターを持ったまま、ぼう然と彼女の後ろ姿を見送っていた。

#### <後編>

ナレーション わたし、黒澤みずほ。わたしのクラスに転入生が来た。ハンパじゃなく無口の子で、名前は緑川蘭。色白で顔立ちもいいのに、だれともしゃべらないなんてどんな理由があるんだろう。その彼女が今日、何者かに上履きを奪われてしまった。そして学校の帰り、わたしの下駄履きの上に何と彼女の上履きがあったのだ。けれどその上履きはカッターで引き裂かれ、無残な姿をしていた。そこへ彼女がやってきて、わたしとその両手に持っているものを見て、泣きながら出て行ってしまったのだ。

#### <タイトル>

みずほ ちょ、ちょっと！ わたしじゃないのよー！

ナレーション 不安になったわたしだが、別に本当のことを言えばいいんだし、逆にこれを機に彼女がなんとか話せるようにしてあげようと思いついた。真男が彼女の友達になろうとするのを、そばで応援する気でいたけど、彼女がこんなひどい目に遭ったのを見たら、黙っていられなくなったのだ。  
わたしは家に着くと、思い切って彼女の家電話した。

(効果音) (呼び出し音と受話器を取る音)

蘭の母 (フィルター音)はい、緑川でございますが。

みずほ あ、わたし、蘭さんと同じクラスの黒澤というんですけど、蘭さんいらっしゃ

いますか？

母 (フィルター音) あら、蘭のお友達ですか？ ちょっと待ってくださいね。今呼びますから。

みずほ(モノローグ) お母さんみたいだけど、なんだかあの子に電話あったのがうれしそうだったな。やっぱ前の学校でも友達がいなかったのかな。

母 (フィルター音) じゃ代わりますね。(少し間)

みずほ もしもし？ あ、あの一、聞こえてますか？ (モノローグ) もう。聴いてんのかな。

みずほ あのね、上履きあんなにしたのは、わたしじゃないから。それだけは信じて。わたしは発見者なの。分かって。(間) 聴いてるんでしょ？ お願い、答えて。

蘭 (フィルター音) …ありがとう。

みずほ え、何？

(効果音) (ブツツと電話の切れる音)

みずほ(モノローグ) 切れちゃった。でも、今言ったよ、あの子。かすかだけど、確かに「ありがとう」って言った。通じたんだ！

ナレーション わたしは、何か無性にうれしかった。次の日、わたしは早速バンドの仲間に報告した。

久志 へえー、そう。よかったじゃん！

郷 やったね、みずほ。やっぱり、こっちから本気になって話しかければ、通じるんだよ。

真男 ほんとだね。こうなったら、共同作戦でいこうよ、みずほ。

みずほ うん、そのつもり。あんなことする犯人も赦<sup>ゆる</sup>せないけど、今は、犯人捜しよりも、あの子の心を開いて、わたしたちが、彼女の仲間になってあげることが先決だと思うんだ。

郷 そりゃそうだな。おれたちのスタジオ練習に誘ってみるか。

久志 それいいけど、いきなり言って、来るかな。

みずほ やってみなきゃ。とにかくみんなで話しかけて、きっかけつくるのが先だもん。

真男 うん。でもバレバレだとかえって逆効果だよ。それと、あんまり気負わないほうがいいと思う。あの子の心の傷が本当に深いんだったら、そっと見守ってあげないと。

郷 さすがクリスチャン、読みが深い！ よし、じゃあしたはとにかく、“さりげなく一言”だ。いいな？

みんな (口々に)「うん」「分かった」「任せて」

ナレーション 次の日、学活の時間のことだった。

先生 今日はまず、みんなに言うておくことがある。おとといなくなった緑川の上履

きの件だが、黒澤が見つけてくれた。だがその上履きは、こうなった。

ナレーション 先生は、ズタズタになった彼女の上履きを見せた。

みんな (口々に)「ええ、ひどい!」「だれ、こんなことしたの?」「赦せねえな」

先生 先生はこれを、クラスの者がやったとは言いたくない。でも、転入してきたばかりの緑川にこういうことをするとしたら、やはりこのクラスのだれかがしたことになる。今までこんなことが起きなかつただけに、先生はとても残念だ。

ナレーション みんな静まり返って、だれ一人しゃべろうとしなかった。その間、緑川さんはじっと黙ってうつむいていた。こんなことをした犯人への憎しみと、彼女のことがかわいそうで、暗い気持ちでいると、真男が声をかけてきた。

真男 みずほ、今日は思い切って緑川さんと話してみる。

みずほ あ、そう。わたしも、あの子をどうやって慰めてあげようかって考えてたの。伊勢ちゃんや久志も入れて、4人で声かけようか?

真男 いや。今日は僕一人で話してみる。あとで結果教えるから。

ナレーション こうしてその日の午後、真男が緑川さんと会ったあとで聞いたその時の様子はこうだった――。

(音楽) (ブリッジ)

真男 緑川さん。君、前の学校でも、こんなふうに黙り続けていたの?

蘭 ……

真男 僕は君の過去のことは全然知らない。でもよかったら話してみてくれないかな。じっと黙ってるって、ほんとはものすごく苦しいことだと思うんだよね。

蘭 ……

真男 今まで君は、つらくても、頼ったりすがったりできる人がいなかったんじゃない?

蘭 ……

真男 僕に心を開いてみて。君と話すのは初めてだけど、君のこと、みずほや久志に何度も聞いて、何とかしてあげたいんだ。

蘭 ……

真男 なんか、ものすごく人間がイヤになるようなことがあったんじゃないのかな。僕の場合はね、もう昔のことだけど、学校の先生とちょっとした言い争いをしたことがあるんだ。それで、僕は別に悪いことは言ってないと思って平然としていた。そしたら先生のほうが、何かあると僕のほうに突っかかってくるようになった。「先生の机に落書きしたの、お前だろ」みたいだね。言い争った時、一言でも謝っとけば、こんなことにならなかつたのにとすぐに後悔した。僕、バカだからな。

蘭 ……そんなこと、…ない、…と思う。

真男 そう? そう思う?

蘭                   あなたの…、考えは…、正しいわ。

真男                どうして？

蘭                   自分が間違っていないって確信があったら、どこまでもそれを通すべきだと思う。それを、相手が先生だからとか、自分より強い子だからと思って、自分を曲げて相手の思うとおりにしたら、自分の負けだわ。

真男                緑川さん。…何があったの？

蘭                   中3の時にね。クラスに好きな男子がいたの。でもその人を、隣のクラスの不良の女子が前から好きで、わたしがその男子と交際していることを知ると、女の子たちと、わたしを呼びつけて、「徹はあたしのもんだから手を出すな」って脅したの。でもわたしはその人、徹君をほんとに好きだったから、何を言われても彼との交際をやめなかった。そしたら、その不良の女の子は、うちのクラスの生徒に、わたしのあることないことを言いふらして、シカトさせるようにしたの。

真男                ひどい…。どんなこと言われたの？ あ、話したくなきゃいいけど。

蘭                   わたしの両親、わたしが中2の時に離婚したんだけど、「あれは母親がほかに男をつかったからだ」とか、「あの子ども、母親の血を引いて、徹と不純な関係だ」とか…。悔しかった。それでもわたし、徹を信じてた。徹さえ分かってくれたら、耐えられると思ってた。でも…。(涙ぐむ)

真男                そうじゃ…なかったんだ。

蘭                   徹は、これ以上うわさを立てられると迷惑だし、いろいろと進路にも差し支えるって、わたしから去っていったの。わたし、もう何もかも信じられなくなって、その時から貝のように心を閉ざしてしまった。人を愛するどころか、人の言葉を信じることも、人と話すことさえ、怖くて、恐ろしくて…。

真男                緑川さん。話してくれてありがとう。あんまりつらくて、何て言ったらいいか分かんない。僕も先生からいじめられた時、もう学校に行くのさえイヤだと思ったけど、君の体験って、そんなハンパじゃなかったんだ。でもね、僕の場合は、“何も悪くないのにこんな目に遭って。だれも僕のこと分かってくれない”ってことが本当に悲しくて、ふっと、普通っていた教会に行ってみる気になったんだ。

蘭                   教会？ キリスト教の？

真男                うん。“イエス様は、どんなつらいときにも、寂しいときにも、守ってくれる。助けてくれる”って、小さい時に聞いた言葉が、なぜか心の中に響いてきたんだ。

蘭                   イエス様って、本当にいるの？

真男                うん。イエス様、生きてる。“周りのすべての人が裏切っても、僕のこと分かってくれなくても、イエス様はすべてをご存じなんだ”ってことが分かった時、“あ、この方が一緒なら、生きていける”って思った。素直になれた。そしたらね、不

思議なんだけど、“絶対に自分は正しい”と思う心の奥にも、実は醜い、自分中心の思いがいっぱいあるってことが見えてきて、そんな自分でも、イエス様はありのまま愛して下さったって分かったら、もううれしくて、涙が出てきて、イエス様を信じちゃったんだ。

- 蘭 山崎君。どうしたら、イエス様信じられるの？ わたしでも、いいかな。
- 真男 あ、ほんとはね、その言葉待ってたんだ。君にイエス様のこと知ってもらえるようにって、一生懸命祈りながら来たんだよ。来週、教会に行ってみない？
- 蘭 ええ、お願い。
- (音楽) (ブリッジ)
- ナレーション ——という真男の話だった。
- みずほ(モノローグ) 緑川さんが身の上話までして、しゃべるようになったって。信じられない。イエス様の話って、そんなに強烈なのかな。
- ナレーション そこへ向こうから真男がやってきた。今日は、文化祭のバンド練習の最後の仕上げの日で、4人待ち合わせで最後の真男を待っていたのだ。
- 郷 あれ、真男と一緒に来るの、だれだよ？
- 久志 あ、あれ、あの子、緑川さんじゃないか！
- ナレーション まさしくそれは、緑川さんだった。わたしは目を疑いながらも、“やっぱり真男の神様はホンモノだ”と一人つぶやいていた。

<完>